

尿細胞診で尿路上皮癌と腺癌の鑑別に苦慮した1例

演者：桑垣 里茄

【はじめに】

今回我々は、尿沈渣にて異型細胞となり、細胞診が追加され、尿路上皮癌と腺癌の判定が困難な症例を経験したので報告する。

【症例】

年齢:40 代後半、性別:女性、血尿のため尿沈渣検査を実施した。

【尿沈渣所見】

核が腫大し核小体を認め、核偏在性の異型細胞が見られた。粗剛なクロマチンパターンを示す異型細胞と微細なクロマチンパターンを示す異型細胞が見られた。

【細胞所見】

核が腫大し粗剛なクロマチンパターンを示すの異型細胞と微細なクロマチンパターンを示す異型細胞が見られた。ともに核小体を認め、核偏在傾向を示し、孤立散在性で出現している。細胞診所見としては、尿路上皮癌よりも腺癌を疑い悪性・ClassVとして、結果を報告した。

【組織所見】

核が腫大し核小体や核不整が見られる異型細胞が見られる。一部に核偏在性を示し核小体も認め、細胞質に空胞が見られる異型細胞が見られる。アルシアン青-PAS 重染色を実施し、空胞を認める部分は PAS 陽性反応を示しており、中性から酸性を示す粘液であると考ええる。

上記より、尿路上皮癌から腺癌への移行を示す組織像が見られるため、腺上皮への分化を伴う浸潤性尿路上皮癌 (Invasive urothelial carcinoma with glandular differentiation) と診断された。

【まとめ】

今回の症例は尿路上皮癌か腺癌か判定がわかれた症例であった。この症例では、細胞診で腺癌と尿路上皮癌を区別することは難しい。このようなパターンの場合、細胞診では尿路上皮癌の分化パターンも考慮して判定する必要があると考えさせられる症例であった。

病理検査室 (HPL)

079-268-1101 (代表)